

令和3年度 第1回東御市総合教育会議 会議録

1 日時

令和3年(2021年)10月12日(火) 午前9時30分から午前10時30分まで

2 場所

全員協議会室

3 議題

(1)学校ICT教育について

(2)不登校対策に係る進捗状況について

4 出席者

○市長 花岡利夫

○教育長 小山隆文

○委員

教育長職務代理者 下村征子

委員 小林経明

委員 直井良一

委員 五十嵐英美

○その他

坂口教育次長、山邊教育課長、樋沢生涯学習課長

土屋学校教育係長、長岡指導主事、畑田指導主事

中村学校教育係主査、土屋学校教育係主査

会議録

坂口教育次長

ただ今から令和3年度第1回東御市総合教育会議を開催します。
はじめに市長、教育長からごあいさつをお願いします。

花岡市長

おはようございます。

五十嵐教育委員をお迎えして初めての総合教育会議となりました。現役の子育て中の保護者でもありますので、率直なご意見をいただければと思います。

新型コロナウイルス感染症が様々な状況の中でぐっと陽性者が減っているということがありません。近隣の状況に比べても東御市は比較的落ち着いた状態で過ごすことが出来ていますが、ワクチン接種も進み接種率が80%を超えてきている状況で、感染者数も落ち着いてくれるのではないかと期待しております。

台風19号による被害からの復旧ということで、海野宿橋は最終復旧に入っており、一日でも早く願っているところではありますが、本年度中の完成を目途に工事が進められております。他の千曲川と鹿曲川に架かる橋についても基礎工事が終わり、順次復旧が進められているところでございます。本日は、大きな課題である不登校対策と学校ICT教育について事務局から説明させていただきます。是非とも忌憚のないご意見をいただきたいとお願いしまして、ご挨拶に代えさせていただきます。よろしく申し上げます。

小山教育長

皆様方おはようございます。ご参集を頂き誠に有り難うございます。

10月4日月曜日の阿部知事の記者会見で、上田広域圏も感染警戒レベルが3になりました。私達が出来る感染対策にはどうしても限りがありますが、油断を排しながらも、教育現場の安心・安全が担保できるように、引き続き学校との連携を図って参りたいと思っております。待ちかねていたのかもしれませんが、翌日には中央公民館のラウンジにも、学びに向かう中・高生の姿が戻って参りました。少しずつではありますが進み行く秋景色とも重なり、若い皆さんからも「収穫の秋」「実りの秋」を実感することができました。

さて、本日の総合教育会議ですが、本年度の重点であります、「不登校対策」と「ICT教育の推進」につきまして中間報告をさせていただきます。進捗状況等を共有させていただきますが、後半の取組に向けまして新たなご教示を頂けましたらと願っておりますので宜しくお願い致します。

坂口教育次長

ありがとうございました。次に議題に入らせていただきます。まず、(1)学校ICT教育について、

令和2年度より1人1台のタブレット配備と全小中学校及び中央公民館並びに地区公民館にWi-Fi環境が整備されました。つきましては、本年度の活用状況とその中で見えてまいりました課題について事務局から説明させていただきたいと思っております。

山邊教育課長

資料をご覧ください。こちらにつきましてはタブレット及びデジタル教科書の4月から現在までの活用状況について、学校・学年・教科ごとに振り分け、それぞれの事例・良さ・課題について各学校から調査したものを載せております。また、今後の計画として東御市内小学校英語による交流授業を計画しており、東御市内に在籍する全小学生に英語を通して同年代の他の学校の児童同士で対話活動をすることで、英語がコミュニケーションツールであることを実感し、自主的に英語学習に取り組む児童を育てるものとなっております。中学校入学時の不安の軽減や同じ東御市内の仲間である意識を高めることを目的としております。その中で本年度、タブレットを活用して自身の学級から他校の児童と英語を通して交流をすることで、ICT教育の実践も推進していきたいと考えております。全体的な課題としては、教員の授業等でのICT使用に差があり、ICT使用に係る教育委員会からの伝達事項が教員によっては理解されていないことが見受けられるため、学校への支援が必要という点がございます。

小林委員

学校ICT支援連絡協議会としては、教員の温度差が大きいということは想定していた部分でもあります。数人の先生が積極的に使いこなしている中で、その先生が他の先生を引っ張っているという良い動きも見受けられます。ただし、アプリの利用に関して市教委として推奨しているものではなく、使い慣れている等の点から他のものを使用したいという声が上がってきているところもございます。市としてはコスト等の問題もあると思っておりますし、協議会で検討したうえで推奨しているということもありますので、そういった部分が先ほど課題として挙げられた、伝達事項の浸透が不十分であると見受けられる点でもあると思っております。

花岡市長

アプリ使用に係るコストの部分ですが、無料と有料の差異を見比べていただき、その差異の必要性等から判断していただけたらと思っております。

小山教育長

主幹指導主事訪問で授業を参観させていただきましたが、6年生はタブレットを活用して単語をスムーズに調べたり、4年生は習字の時間で書き方の動画を見ながら集中力を高めている姿が見てとれました。日常的に様々な場面で使える環境を進めていただけてかなり積極的な活用ができてお感じしております。使うことから始めないとより効果的な取り組みにも繋がっていかないと考えますので、協議会の皆様にご協力いただきながら良い形で進めていきたいと考えております。ICT支援員の方のご協力、社会科見学として自動車工場をリモートで見学することもでき、大変

勉強になっていると感じました。一番大切なのは仲間同士の情報交換がしやすい環境を作ることかと思しますので、校長会とも協議し、こちらからも積極的に関わりを持ちながら現場の実践事例を見させてもらい、効果的な方法を共有しあっていければと思います。繋がりを広げ質を高め、その中で生じた疑問点などは協議会の皆様にもご協力いただければと思います。

下村委員

体育のマット運動の際にも二人一組で互いの姿勢をタブレットで撮り合ったりと触れる機会を作っていました。

小林委員

子どもたちは、映像・音楽・情報はすぐ使いこなせるようになると思います。先生より使い方をよく知っている子どもたちが何人もいて、そこで一つ考えなければならないのは、ネットに対する危険性を重要視するために先生方から「制限をかけたかどうか」という意見が出ていることです。使い方を制限するのではなく、大人と同じような状況の中で使用していき、リテラシー教育をしっかりと行う方が大切なのではと思います。

花岡市長

フェイクニュースというものが一般的に使われるようになってきました。タイムリーなものでいうとワクチンに対する様々な情報が飛び交っていて、接種を選択する際に問題となってきています。打った場合・打たなかった場合の社会的状況や個人の選択の自由がある中で、100対1の事象を1対1に見えるように扱われることがあって、そうやって市民に選択を迫ると適正な判断ができない危険があります。情報の中にある適正な数値や確率を掴む力を身に付けてもらいたいと思います。

小林委員

ワクチンに関してのフェイクニュースは特に多いと思います。事実が不明瞭な情報を、情報源を明らかにしないまま記事にしてあるものも散見されています。ニュースというものは一次情報が一番大切なので三次情報で振り回されることがないように子どもたちに教えなくてはならない大事なことだと思います。

花岡市長

ワクチン接種に関しては、様々なことを懸念して打たない方もいらっしゃいますし、小中学生のお子さんがある家庭は色々な情報を見て考えておられるようです。ブレイクスルー感染や接種の有無の数値等を明確にしないと正しい判断を出来ない可能性があると考えられます。確かに東御市はネットリテラシーに関して頑張ってきたところがありますが、これから更にネットリテラシーは避けて通れない時代となっていくと思いますので、正確な情報が伝わるように指導していく必要があるかと思っています。もちろん未然に防げるものは対策をとっていただければいいですが、ネットが偏在す

る時代で個々の意識に対する教育が必要だと思えます。

坂口教育次長

その他、何かご意見ありますでしょうか。

直井委員

デジタル教科書の指導用の物は児童生徒用の物より少し高いと聞いておりますが、先生の指導に役立つのであれば導入し活用してほしいと考えます。

土屋学校教育係長

本年度デジタル教科書は文部科学省の実証実験という形で導入している所でございますが、あくまでも実証実験であり、本年度の活用方法を踏まえて来年度以降どうしていくかをこれから判断していく予定ですので、指導用のテキストを導入することは現在は費用対効果の面で見合わせているという状況です。来年度以降もデジタル教科書の無償配布などの場合ですと検討もしていきたいと考えております。

直井委員

国の方針も気になる場所ですね。

小林委員

国の方針でいえば、デジタル教科書など中身もそうですがタブレット自体も耐用年数がある中で、数年使い続けた以降は国は買い替えの予算をつけてくれるのかも疑問です。国が補助を出さないのであれば、数年後に市が丸ごと買い替え分を負担する年が必ず来ることになるので、その際どうしていくか今のうちから計画を立てていかないといけないのではないかと思います。

花岡市長

耐用年数を考えると大体6年前後、そうすると今の小学1年生が卒業する際に新1年生へそのまま渡すわけにはいかないと思いますので、その際には必ず経費がかかるわけですから、予算の計画を立てていくしかないと思います。

小林委員

6年後は4,000万円ほどだと見込まれています。そこから毎年その費用がかかるのか、どこの市町村も大きな悩みとなるかと思えます。

坂口教育次長

この課題は必ず訪れることなので、教育委員会としても財政面については考えていかなければならないところです。

花岡市長

国の方針や施策についても今後期待するところではありますが、どちらにしろ市の負担について考えていく必要があると思っています。

実際の使用については、子どもたちはどのような印象がありますでしょうか。

五十嵐委員

タブレット使用について、我が家では最初は言われたところ以外は押したりしてはいけないのかなと恐る恐る使っていたようですが、先生から説明をしっかりと受けて、段々と子ども同士がお互いに相談したり自然と情報共有したりしながら使いこなしている印象を受けました。

小林委員

何の制限もないはずなので、自由に試行錯誤してもらえばいいですね。

五十嵐委員

あとはタブレットのキーボードにあるエンターキーや様々なキーについて結構分からないまま使っている印象もありました。

小林委員

今はキーボード入力なのですが、子どもたちはスマートフォンのフリック入力等に慣れているので、パソコンのキーボードのような使用方法は苦戦しているとも聞いております。

花岡市長

それと合わせて気になっているのですが、低学年は現在かな入力で教えているとのことですが、ローマ字入力にするなどの検討はどう考えておりますか。なかなか途中で変えづらいということもあるかと思うので、低学年のうちからの検討もしておいた方がいいのかもしれない。

小林委員

4年生からローマ字を覚え始めるので、その辺りから入力方法を検討すると指導要領で定めております。

小山教育長

タイピングソフトなどについてはどうなっているのでしょうか。

土屋学校教育係長

現在無料のもので検討しているところでございます。

小山教育長

ローマ字については子どもの順応性も高いと思うので、切り替えについては案外子どもたちはすぐに慣れるような気もするのですがどうでしょうか。

小林委員

最終的にはブラインドタッチで入力することを考えると、かな入力よりローマ字入力が必要になってきますので、出来ることなら最初からローマ字入力をしてもらう方が個人的にはスムーズなのではないかなと思います。

小山教育長

確かにそういう面もありますね。この辺りは今後検討していきたいと思います。どちらにしろ子どもの混乱を出来るだけ少なくしてあげられたらと思います。

坂口教育次長

ありがとうございました。次に(2)不登校対策に係る進捗状況について、事務局からご説明をさせていただきます。

山邊教育課長

説明します。不登校対策の状況ということで、小中学校ともに令和2年度の状況を載せさせていただいています。今年度からの取り入れた対策としましては、子ども家庭支援準備室との連携、長野大学との連携がございます。

坂口教育次長

子ども家庭支援準備室は令和4年からは支援センターとして始まります。

小林委員

以前、市長から教育長や学校長、そして教職員が一丸となって不登校対策を行い、人数がとて減った頃がありましたが、それがまた段々と増えていっているということは、属人的なのかなと思ってしまふところがあります。つまり学校を預かる人々の意識が不登校対策に向いていない結果が数字に表れているように思います。今は経費はかけてくれますが人が動いていないのを感じます。

小山教育長

当時、平成22年度あたりに支援員を入れていただいて一つの刺激剤となりました。もう一つは子どもたちへの直接的な応援があったと思います。昨今の流れの中で『多様化』という言葉もありますが、家庭の問題や発達特性などの本人課題など様々な要因を抱える子どもが増えてきているというのが事実であり、教育現場だけの支援では中々対応しきれないという状況が来ているの

ではないかと考えます。そこにコロナウイルス感染症が追い討ちをかけるように流行していて、子どもたちの中でも欠席に繋がっているのが現状にございます。もう一つは家庭の経済的な大変さを子どもたちも背負わされているような状況です。学校に向かう以上に気持ちが落ち込んでしまうようなこともあるかと思われます。そして小林委員が仰るとおり、教員が自分の中の使命として子どもたちをしっかりと支え、声をしっかりと聞いて悩み事を共有する、そういった中から支えになる言葉や具体的な支援のあり方を探ってもらわないと改善はなかなか難しいように思います。そのことを考えると学校の相対的な意識変革が求められますし、それに足りない部分を行政側が応援し補っていくことが昨今の流れとして大切なのだと考えております。

小林委員

前回市長が中心となって動いた不登校対策は、教員も問題意識を持っており、且つ支援員を手厚く入れて全員で動いておりました。時が経つにつれて、不登校は支援員がやればよいという意識となっている気がしています。学校全体という以上、教員も支援員も共に動いていかなければならない時代なのではないでしょうか。

小山教育長

学校が組織として一体となり子どもたちの支援に回っていくという方向性は、絶対に求められると思います。ただ、学校の先生方も昔より仕事が増えている状況にあり、部活の面は改善を図っているものの、どうしても人に任せてしまうという形になっているのが課題だと思います。例えばスクールカウンセラーは相談業務を行っておりますが、まず相談を受けた教員がしっかりと子どもと向き合い、専門性が必要な場合にはスクールカウンセラーへ繋げるなど、子どもに自己決定を促しながらそういう場を作ってあげることが大切だと思います。まずは最前線にいる先生方が悩みに対して聞く対応をとってあげることが、子どもに安心してもらえるような環境を作ってあげられるのではと思います。ただ先生のそういった時間を作ってあげて意識を高めていけるよう学校を訪問しながら努めてまいりたいと思っています。

花岡市長

以前は小林委員や教育長が言っていたような形で不登校対策をやってもらってきたんですが、それがその子にとって本当に必要なことか、根本的解決になったのかと今は思っています。ではやらない方が良かったのかということとは決してなく、もっと効果的な方法の検討もお願いしているところはありますが、そもそも教育委員会の不登校対策というのは中学校までですが、その子はその先の将来もございます。国の施策そのものも「子育て」支援というよりは「子育て」支援という子どもを中心に考えていくこと、子どものために家庭や親の支援もしていかなければならないという考えにあります。長野県は自殺者が非常に多いこともあるのですが、いい学校いい大学いい会社とその子の幸せに繋がってないということに関して社会がそろそろ気付かないといけな時代になっているのではないかと思います。その子の幸せ、生きる目的のようなものに関してもっと向き合えるような行政に変えていかないと駄目なのではという思いがあり、準備室からですが

「本物を作りたい」という気持ちで、子育ての状態もしくはそれ以前のところから学校や家庭環境、そして卒業してからの引きこもりの問題なども含めてフル装備のものを来年度からセンターとして動き始めたいと考えています。

小林委員

それはいいことだと思います。

花岡市長

この問題は待たないと思っています。不登校がいけないというよりも自己肯定感がないことの方がよくないという思いがあり、それぞれの持っている能力を発揮しながら社会に関わっていくことで、人生の喜びを感じていく、そのサポートをしっかりと出来ることが重要だと感じています。

今までは子どものためになると信じて不登校を減らしてきたという経過もあるんですが、不登校でなくなったときにそれがその子の人生にとって良かったかどうかということに関してまで付き合っていけるような体制が必要なんじゃないかと思っています。

小林委員

それは二つの問題等にも繋がっていきますし、彼らが社会に復帰できたときの経済効果にも繋がる部分もあり政治の役割は大きいと思います。

花岡市長

子どもたちが世界へ羽ばたくことも大切ですが、この地で社会貢献してくれるようになることは、とても大切なことだと感じております。準備室はやはり東御市にとって必要なものと感じております。

小林委員

ちなみに、準備室をセンター化してそこで不登校対策を進めていくということでしょうか。

花岡市長

もちろん教育委員会や学校も不登校対策を行っていくのですが、情報共有しながらセンターも家庭のサポートなどを行い、何が東御市にとって足りていないのか見つけ出して解決のために何が必要か動いていくことが必要だと思っています。

小山教育長

本年は準備室として始動いたしました。これは来年度センター化ということで組織化しまして、スピード感のある対応ができるようにという部分と、一番大事な部分として家庭や子どもに寄り添う支援として、その子にとっての解決をしていきたいと思っています。実際にやってみて新たな課題が出てくることもございますが、そういう課題に対しては、今までやってきた一つ一つのことから

次のやり方を見つけることができれば、大きな力になるのではと感じています。それを関係する部署が一緒になって解決に向かって動いていくことで、切れ目のない支援体制が出来るのではと思っています。

花岡市長

かなり重要な部署になると思いますし、頑張りたいと思っています。世の中でキャリア教育という言葉が使われていますが、キャリア教育とは「自立した社会性を学ぶ教育」だということで、自分の幸せのために社会に出て自己学習するということになります。そういったことを子どもたちは本質を分からないままやるよりも、子どもたちにも納得して行動できるような伝え方も必要だと感じます。言葉一つとっても子どもにも納得してもらえているかという立ち止まって考えざるを得ないでしょうし、今その中で置いていかれているという子どもがいるということは考えることは沢山あると思うんですけども、教育だけではなく市も体制を取ろうと考えて、その中に教育も入ってもらうことが大切だと感じています。

小林委員

ぜひセンター化は成功したいですね。

下村委員

素晴らしい構想だと思いますし、いくつもの課が協力するというのも確かに大事だと思います。支援として、家庭環境の問題など子どもだけに目を向けることができなくなっている以上、関係各所の理解と連携が大事になってくると思います。

花岡市長

支援を必要としている家庭などでは、担当する課題だけでなくバックグラウンドを含めた困りごとに寄り添ってあげることが解決の糸口になるものもあるのかもしれない。

小山教育長

センター化に向けての動きは知恵をお借りしながらスタートに向けてしっかりと取り組んでまいりたいと思います。特に不登校関係については家庭そのものの部分も含め、出来るところから始めていきたいと思っています。また数値というものだけでなく一つの事案としてしっかりと取り組んでまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

坂口教育次長

ありがとうございました。以上で令和3年度第1回総合教育会議を閉会とさせていただきます。